

三半規管

有森信二

とまどいがちに鳴った
職場からの電話

決算終了

しつこい風邪は治った
仕事は任されるようになったし

本腰入れて頑張るよ
最近

すぐくオーラの綺麗な人を
見付けたんだ

と
おどけていた子供が

仕事に出てこないんです
無断欠勤などしたことは

一度もありません
アパートの鍵を開けるには
身内の方から
大家への連絡が必要なのです

途端に

ぼくの頭の芯の蝸牛が
角を出し足を伸ばし
天井を掴むかに
立ち上がろうとした

前後左右に

たたらを踏み

沈降や上昇の
定まらない動きを繰り返す

ねばならぬのなら

せめて

少しだけ後に

這い出してはくれないか
とんぼ返りなど

いまのいまは

よしてはくれないか

くすぶり始めた
煙霧に包み込まれ
夢を見ている加減のぼくの
三半規管よ
お前は どうして
そんなにしやりむり
走り出ようとするのか

ぼくはもう
老人と呼ばれているし
高熱の間ぐらい
無闇に這い出すのは
待つてはくれないか

ともかく
いまのぼくは
子供のころへ
東京行きの終便のチケットを
筆り取ってでも
辿り着かねばならないのだよ

行方もしれず

北風が吹いている
闇のうちに吹いている
街灯の下にも吹いている

北風が吹いている
小さな明かりの点いた
屋根の上に吹いている
明かりの灯らない屋根の
上にも吹いている

北風が吹いている
公園の埃を巻き上げ吹いている
ベンチの足元に吹いている
トイレの裏にも吹いている

北風が吹いている
空の上にも吹いている

休みを返上し決算を終え
しつこかった風邪も治り
明日も明後日も週末も
数えきれない楽しみの
約束をしていた青年の

最後のライン交信は

二十三時三十三分

フレンチも

イタリアンも寿司も

中華もタイ料理もOKですよ（笑）
と

二ヶ月前に出会ったばかりの

オーラの綺麗な

人に向けたメッセー
ジ

翌朝

アパートの一室で青年は

眠りから一度も覚めることが
なかったのだ

ワッハッハッハ

と含羞を溜めながらの
象嵌されたことばも
交信に刻まれていてというのに

六時間足らずの眠りの間に
降りるべき駅を乗り過ぎたのだ
とでもいうのだろうか

とにもかくにも
眠りから覚めることが
なかったというこの意味が
分からない
なんの鶯鳥だというのだろう
なんのキリギリスだというの
だろう

北風が吹いている
闇のうちにも空の上にも吹いている
アパートの周りを
行方もしれずびょうびょうと
いまあらねばならぬもののように
空洞に猛り
吹き抜けている